

チェルノブイリに思いをよせて

ポレーション

要請文

ジトーミル州行政長殿

私達は、チェルノブイリ原発事故による被災者救援のため、1990年に発足した市民団体「チェルノブイリ救援・中部」のメンバーです。

この間ジトーミル州の医療機関と被災者に対して、医薬品代の提供、粉ミルクの提供、日本での医師研修、保育器・医療機器の提供と補修、などの支援を15年間にわたって継続的に行ってきました。

特に近年、事故当時、消火活動や除染活動等に従事し、被害の拡大を自らの健康を犠牲にして防いでくれた事故処理作業の方々への支援を重点に行っております。本年10月ジトーミルを訪問し、事故処理作業者の団体と懇談をもちました。その際、かつて州立成人病院にチェルノブイリ・セクションが存在し、被災者に対し無料で治療や医薬品の提供がなされていたこと。現在そのセクションは廃止され、被災者は大変困った状態におかれていることを聞きました。そのようなセクションの存在は、事故処理作業者の医療に関わる多くの問題を解決するものと考えます。被災者は同セクションの復活を切実に希望しており、私達チェルノブイリ救援・中部としても全面的にこれを支持したいと考えます。

よろしく善処いただけますようお願いいたします。

2005.12 チェルノブイリ救援・中部

チェルノブイリの被害は、依然として深刻であるにもかかわらず、現地を訪れるたびに「過去のものとして葬り去ろうとする」流れも感じます。二度と悲惨な事故を繰り返さないためにも、私達は、こうした被災者の活動を支援していきたいと思っております。
(小牧 崇)

州立成人病院の

チェルノブイリ・セクション復活を!!

20年前のチェルノブイリ原発事故で、とりわけ深刻な健康被害を受けたのは、事故処理作業に関わった方々でした。当初こそ、手厚い医療の恩恵を受けていた彼らですが、その後時の経過とともに行政から見放され、大変厳しい状況下に置かれています。

彼らに対する支援は、私達の活動の大切な柱です。昨年10月訪問した際も、事故処理作業者の団体と懇談をもちました。その中で、リクヴィダートルの代表であるタビノヴァさんから、私達の支援に対する感謝の言葉とともに、ご自身の活動として「チェルノブイリ・セクションの復活を州行政当局に働きかけている」との話を聞きました。

このセクションは、州立成人病院の中に置かれ、被災者に対し無料で治療や医薬品の提供を行っていましたが、94年に廃止されました。彼女たちの働きかけで、州保健局長は復活に同意したとも聞いています。私達の側面援助によって、実現に向け一歩でも二歩でも進めばと思い、またホステージ基金のキリチャンスキー氏の強い勧めもあり、帰国後要請文を作成しジトーミル州行政長に向け送りしました。

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

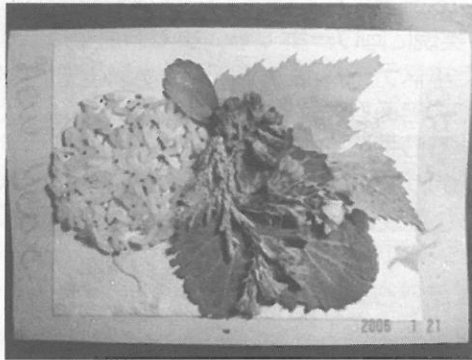
クリスマスカードを贈ろう！キャンペーン 結果ご報告

去る12月14日、16日の両日、当事務局にて発送作業をしました。全国から届いたカードは、なんと1235通。その一通一通に、折り紙とウクライナ語のメッセージカードを添えて、箱詰めしていきます。「カードを確認し、色合いをみて折り紙を選び封入する。」…言葉で説明してしまうと単純なこの作業ですが、千通を超える量をこなすには、想像よりはるかに時間がかかりました。受け取ってくれる子ども達それぞれを思い浮かべながら、クリスマスまでに間に合わせたいという焦りと、仕上げたいという想いとが、葛藤していました。そして、何より作品の素晴らしさに見入ってしまうので、思うようにはかどらないのでした。

現地からの報告によると12月30日と今年1月4日に無事届き、ロシア正教のクリスマスである1月7日に、ジトーミル州立・市立小児病院、州立孤児院、また事故処理被害者の消防署職員の子供達に贈られました。また、10月の訪問団が訪れたナロジチ地区ポロトヌィツャ村の学校にも届けられ、今後の交流が期待されます。

早速、子ども達からのメッセージやお返しのカードが現地事務所に届きました。(P3も参照してください。)

今回で15回目となり、年末恒例のこのキャンペーンですが、私の初仕事でした。その広告宣伝には、とても苦労しました。ちらしを置いてもらうだけでも断られたり、キャンペーンで訪れた場所では、講演に四苦八苦したりと、活動に自信をなくした時期もありました。「クリスマスカードを書いて子ども達に送る」という、楽しくあるべきはずの行事なのに、企画を遂行することに意識が向きすぎて、楽しめなくなっていたせいかもしれません。そんな中、みなさんから届くカードに添えられたお手紙に、大変勇気付けられました。みなさんのまっすぐな子ども達への思いを預かった以上、確実に届けることが任せられた仕事だと、気持ちを引き締めました。



〈お返しに贈られたカード〉

今回の活動では、新たに参加者を増やすことは思うようにできませんでしたが、最終的に、毎年参加してくださっているみなさんのご厚意に助けられました。こうした活動は、自分ひとりで成し遂げるのではなく、たくさんの人に助けられてこそ成り立つものだと分かりました。賛同を得るには奇をてらう必要はなく、地道に思いを伝えていく。これは、今回の活動を通して学んだことです。長年、ご協力いただいているみなさまへの感謝と、

その活動を続けている「チェルノブイリ救援・中部」の歴史の重みを痛感しました。

今回のキャンペーンの感想や、参加者の対象や拡大の方法など、ご意見いただけるとうれしく思います。今後の参考にさせていただきます。

最後になりましたが、みなさま本当にありがとうございました。今年のクリスマスも、ぜひお会いしましょう。

(遠山)

感謝状（慈善基金 チェルノブイリの人質たちより）

尊敬する日本の友人の皆さん！

皆さんからお送りいただいた、新年とクリスマスのご挨拶のカードに対し、心より感謝申し上げます。郵便は、12月30日に届きましたので、正月と、正教では1月7日に祝うクリスマスの前に、カードを渡すことができました。私たちは、これまで「チェルノブイリ救援・中部」が継続的に支援している、小児病院と州立孤児院にカードを渡しています。また、ナロジチ地区に住み、そこで働いている消防士たちの子ども達にも、カードは渡されました。今回初めて、昨年10月に「救援・中部」の代表団が訪れたポロトヌィツヤ村の学校の生徒にも、カードを渡しました。

今年は、チェルノブイリ原子力発電所事故の20周年になります。ですから、日本国民の皆さん、その若い市民の方たちのご配慮は、私たちにとってとりわけ貴重なのです。私たちの子ども達の微笑は、常につきまとうチェルノブイリの問題を、たとえ一時的にとはいえ、彼ら自身に忘れさせてくれます。そして、彼らが「運命の翻弄するがままに放置されているのではなく、遠い日本の方々にさえも、彼らのことに思いをはせている」と感じる事が、困難を乗り越える助けとなり、勇気とチェルノブイリの災厄に立ち向かう力を生み出すのです。

皆さんのカードがもたらす精神的な支援は、もちろん物質的な支援もきわめて重要だとはいえ、しばしばそれ以上に貴重なものです。私たちは、私たちの子ども達が自ら自分の子ども時代のために闘い、自分の生活を幸せなものにしていくことを、学んでほしいと思います。それは、ほんのちょっとしたことから…日の出づる国の同世代の子ども達のお便りから…始まるのです。

2006年1月18日 V.キリチャンスキー

私がお正月前に入院するのは、もうこれで2度目になります。正直に言うと、私はまた日本からカードが来るのを心待ちにしていました。そして、うれしいことには、カードが来たのです！ツリー〔訳注：年末から1月14日の旧正月頃まで飾られるのが普通〕のそばで集会があり、先生や看護師さんたちが、封筒を渡してくれました。カードや折り鶴をありがとう！私も、もう鶴が折れます。日本みたいな折り紙はありませんが…。私たちは折り鶴に糸をつけて、ツリーに飾りました。遠い日本から、私たちのことを思いやってくれてありがとう。

オーリヤ・ペトルーク
(コーラステン市)

私はゆううつでした。病気で、同じ年代の子ども達といっしょに外で走り回ったり、新年にお祝いの歌を歌って近所を回ったり〔訳注：新年やクリスマスの習慣。子どもたちはご褒美にお菓子をもらう〕できないのに、どうしてゆかいな気分になれるでしょうか？でもその時、私は2つの封筒をもらい、自分の不幸を忘れることができました。ありがとう。もし住所が書いてあったら、知らないお友だちに返事が書けたのですが…。

スヴェータ・シェフチュク
(チェルニャホフ市)

ポロトヌィツャ村の上水道ポンプ修理が完成しました！

長野県南箕輪村 原 富男

昨年10月、ウクライナ訪問団が現地で見えてきた、ナロジチ地区ポロトヌィツャ村の上水道用井戸ポンプの修理が、12月末に完成しました。このポンプは、丸一年間通水していなかった為に、急いで修理しなければ配管内部のサビが固まり、ポンプの修理だけではなく村中の配管の取り換えをしなければならなくなるところでした。

私達「救援・中部」の運営委員会は、このような事情を勘案し、昨年11月、取り急ぎ「ポンプの修理支援」を決定しました。このすばやい対応によって、決定から工事終了まで約2ヶ月の12月28日には修理を終え、水道が使えることとなりました。12月31日付けの竹内さんからの連絡によれば、「本来なら12月10日に修理完了の予定だったが、水道施設の故障後、電線が盗まれてしまっていた（金属スクラップとして売却された!?!）。それを付け直すのに、余分に100グリブナ必要だったが、これは村行政が負担する。村民と村行政は、チェル救の支援に大変感謝している。」とあります。

しかし、全てが完璧というわけではなく、その後竹内さんから「1月12日に、キリチャンスキーさんがポロトヌィツャ村に行った。水道の汲み上げポンプは作動しているが、断線箇所が生じ、その修理をしていた。」という、現地の報告も入っています。このようなアクシデントは、今のウクライナにおいては起こり得ることです。

10月のポロトヌィツャ村訪問後、小牧さんと僕は「何としてもポンプを修理したい!」と話し合ってきました。「伊那谷いのちがだいじ!連絡会」の会計担当でもある小牧さんからは、「全部は出せないけど、会からもお金が出せる」という言葉もあり、カンパの呼びかけを始めました。運営委員会で支援が正式に決まったことをうけ、依頼のチラシを僕が作り、小牧さんは「いないば〜」（会報）にウクライナ訪問特集をつくり、水道ポンプの応援を訴えました。また、小野寺さんにチラシを配ってもらいました。

カンパの第一号は「脱原発・北信濃ネットワーク」。ちょうど長野市で「脱原発2005 in 信州」の集会が行われていて、その会場でも参加者から貴重なカンパをいただきました。「困ったときは知った仲間」…本当にありがたかったですね。その後も、出会う人ごとにチラシを渡し歩いて、結局35名プラス1団体から、計18万円のカンパが寄せられました。

1村14万円×3村で=42万円の予定で始めたカンパです。取り合えず1村分以上集まりました。応援するという思いがなければ何事も始まりなかつたわけですから、1村目のポロトヌィツャ村のポンプ修理が終わり、現にポンプが稼働し給水されていることを、大いに喜ばたいと思います。また、前述の現地報告にある通り、予定外の工事や出費もあるわけですが、全てをこちらが持つというのではなく、できるところは現地でガンバルということも、根付いてきたように思います。

更に、現地事情を調べながら、2つ目の村の修理に向かいたいと思います。皆様のご支援に感謝いたします。



〈故障しているポンプの説明を受ける訪問団〉

2006年2月・ウクライナ訪問へ

戸村 京子

2006年は、チェルノブイリ事故から20周年を迎え、4月には現地へのスタディ・ツアーもあります。今回の代表団は、ちょうどこの時期、在籍中の大学院の交換留学生としてキエフ大学に行く私と、キエフ駐在の竹内高明さんの2人で、ジトーミルを訪問することになりました。

訪問日程は、2月6日から8日までの2泊3日で、「ホステージ基金」との話し合いが、主な仕事です。話し合いの内容は、

- ① 2006年度の予算について…今年度で終了または区切りとする事業と、次年度も継続して行う事業との予算配分について、先回の運営委員会で協議した案をもとに話し合う。
- ② 来年度新規事業について…ナロジチ地区での新規事業取り組みに向けた調査と提案の内容について、率直な意見交換を行う。
- ③ スタディ・ツアーについて…ジトーミル滞在中の20周年記念セミナー参加や訪問先、「日本・ウクライナ市民交流の日」でのイベントの打ち合わせ、会場の下見など。

毎回、ウクライナ訪問団は、各人仕事を休んで訪し、限られた日程の中で、支援先の病院訪問や被災者団体との面会などのハードスケジュールをこなし、あわただしく帰国することになりますが、今回は、キエフ・ジトーミルの往復のみとなるので、「ホステージ基金」との話し合いも、もう少しゆとりとできるのではないかと思います。

また今回は、同じくキエフ大学へ留学する脇坂晃弘さん(大学2年生)が、自費参加します。脇坂さんは、「チェルノブイリ」を卒論テーマにしており、チェルノブイリ救援に関心を持っています。クリスマスカード・キャンペーンに参加し、またスタディ・ツアーにも現地参加、イベントに協力してもらう予定です。

新年早々、ロシアからウクライナへの天然ガス売買価格について問題となっていました。何とかうまく解決して欲しいと願いつつ、ウクライナへ向けて出発します。(留学期間は、2月から10ヵ月間の予定です。)今度はウクライナから、訪問団の報告やキエフでの生活についてお知らせします。

静岡サレジオ小学校のクリスマス会に招かれて

橋本京子

2005年12月23日午後、恒例の静岡サレジオ小学校のクリスマス会に初めて行ってきました。サレジオ小学校(旧:星美小学校)は、10数年前から毎年続けて、チェルノブイリの被災者を支援してくださっています。毎週1回の「ハッピーランチデー」は「おむすび弁当」で、おかず代をミルク代として寄付、また、1年かけてアルミ缶を集め、車椅子を寄付してくれます。

今年も、ミルク代15万円と車椅子2台、そして保護者の後援会からも5万円をいただきました。クリスマス会の今年のテーマは、「虹のように周りや世界の友だちにまなざしを向け、温かい心の橋をかけよう」。6年生を中心とした、クリスマス・ページェント(宗教劇)から始まりました。かわいくて美しい聖歌のコーラスには、宗教心を持たない私も、心を揺さぶられました。また、4年生のオペレッタ「ピーターパン」は、フック船長に先生も出演して、会場から笑いがもれるなど、楽しい劇でした。ちなみに、4年生は大道具・衣装・照明などの裏方をするのが慣わしだそうです。

入学したばかりの1年生が「なんでおにぎりだけの日があるの?」と聞くと、それに答えるのは上級生だそうです。こうしてチェルノブイリのことが語り継がれているのだと、隣に座られたシスターが話してくださいました。

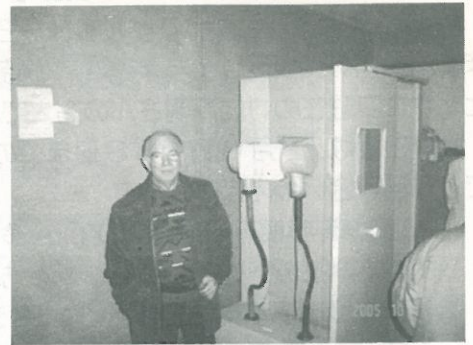
<クリスマス・ページェント(宗教劇)に参加した子ども達>



草の根支援事業の近況報告

…ナロジチ地区中央病院のレントゲン装置配備事業と同地区診療所の基盤整備事業…

神野美知江



1. ナロジチ地区中央病院（レントゲン装置配備事業）

〈1981年製のレントゲン撮影装置〉

ナロジチ地区は、チェルノブイリ事故後に放射能の汚染レベルで区画された「第二ゾーン（強制移住区域）」と「第三ゾーン（任意移住区域）」が混在する地域にあり、開発復興の手がまわらず、過疎地となっています。また、ウクライナ国内の他地域と比較しても、より高い放射能汚染地域と指定されており、開発が進まず、経済的にも貧困です。

そうした地域で、貧困との相関が高い結核は、さらに拡大が予想され、現在ナロジチ地区病院が所有している胸部レントゲン撮影装置は、1981年製で耐用年数を超えていて、頻繁に故障しています。

大使館囑託で、「草の根支援無償プログラム」チェルノブイリ案件担当の松木氏も、「同病院のレントゲン装置の現状を視察し、技師と面談し、今までに撮影された胸部レントゲン写真のサンプルも見ました。写真はサイズが小さく、また画面が鮮明でないため、診断の材料には成り得ないことが分かりました。また技師によれば、同装置は故障回数が多く、性能が劣化しているため、撮影時に胸部に当てる放射線は、2倍近くまで照射線量を強めて撮影している（一回の撮影に受診者が被曝する放射線は0.5ミリシーベルトだが、実際には0.9ミリシーベルト程度の被曝を受けるほど強く照射している）ということも分かりました。」と、感想を述べています。

ナロジチ地区の住民数は10,113人。うち結核患者数は76人で、結核罹患率は、先進国ならびに他の地区に比べても高いとのこと。また結核菌保菌者は、3年間発病しないと患者登録から外すので、潜在的患者数はこれよりも高い可能性があります。

ナロジチ地区中央病院のテブリツキー院長は、「先頃40歳代の結核患者の発見が遅れ、死亡したという例が2件あった。その対策としても、レントゲン撮影装置を買い替え、早期発見に努める必要がある。」と報告しています。結核罹病を未然に防ぎ、早期発見により患者数を減らすためにも、「胸部レントゲン・デジタル写真撮影装置」の配備は不可欠といえるでしょう。

さて、当ナロジチ地区中央病院の「レントゲン装置配備事業」に関しては、昨年10月に、我が「ホステージ基金」が、在ウ日本大使館に申請書類を提出しましたが、11月までに同大使館内の決裁が下り、現在、日本の外務本省で最終審査中となっています。

今年度(2005年度)は、当案件以外に、すでに10月に交付が決定した「ジトーミル市立小児病院」と「ジトーミル市立第2成人外来病院」の2案件、そして、審査中の「オザドフカ村診療所」「デニシサナトリウム」の案件があり、私達が紹介したジトーミル州の案件だけで5件、チェルノブイリ被災者関連は、なんと全体で8プロジェクトにもものぼっているとの



＜ナロジチ地区中央病院＞

いけば、近々「交付決定」の朗報が入るのではないかと、期待しています。

胸部レントゲン装置は、キリチャンスキー氏が業者と交渉したところ、デジタルのもので168,000 グリヴナ（約380万円）との事です。

配備が実現すれば、写真画面をより鮮明にすることができ、操作も容易になります。また、一回の写真撮影で、被検者が受ける放射線も低く抑えられ、何よりも、結核の予防体制が整うことになります。

2. ナロジチ地区診療所（基盤整備事業）

私たちは、前回の「移住者村（ブルシロフ地区）診療所の整備事業」を進めるにあたり、「評価PJ」を立ち上げて、その進め方に関する問題点や成果を検証しました。今回は、その時に学んだことを生かすため、以下の点に注意しながら、申請作業を進めています。

1) ナロジチ地区の22ヶ所の診療所を対象として、事前アンケートを行う。

（アンケート調査は既に行われましたが、キリチャンスキー氏からは、「回収されたアンケートを確認したところ、曖昧な回答が多いので、自らが現地を訪問し再調査を行う。」と約束しました。厳寒の中、何度もナロジチ地区まで行き、診療所の実態が明らかになるようとしています。）

2) アンケートの回答が揃ったら、そのアンケートをもとに、大使館の松木氏が、各診療所の状態・要請機器の種類などをまとめる。

3) 疑問点に関しては、事前にホステージ基金に問い合わせ、実際に提供する機器について充分意見交換を行い、同基金を通じて各診療所との合意を図る。

4) 可能であれば、3月に大使館が実地調査を行う。ただし、大使館職員が地区の全診療所を訪問する必要はない。（外務省に大使館から提出する報告書が、充分説得力のあるものになる材料が得られればよい。）

5) その後、大使館の正式な決裁を得、日本の外務本省への申請に向けて、3社見積りなどを用意し、正式に申請を行う。

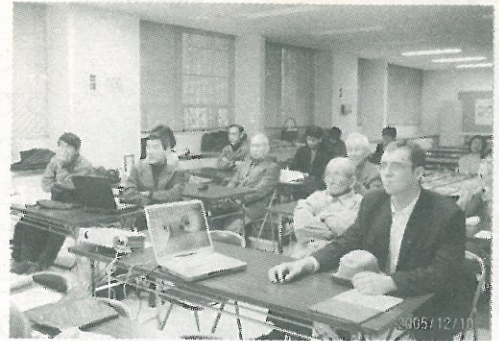
という手順により、「ナロジチ地区診療所基盤整備事業（ナロジチ再興プロジェクトの1つに位置づける）」が実現します。「移住者村診療所支援」で学んだ経験を生かして、新たな地区の診療所整備をより効果的に進めていきます。



＜ナロジチの町を行く荷馬車＞

楽しいウクライナ講座でした

去る12月10日(土)、講師に名古屋国際センター第37代なごや民間大使のベレジヌイ・ビタリーさんをお迎えして、楽しいひとときを過ごしました。ビタリーさんは愛知万博でウクライナ館のアテンダントをしていました。



ひょっとしたら、万博のウクライナ館でお会いしているかもしれませんね。ウクライナの観光を勉強したというビタリーさんのお話は、まるでウクライナを旅しているような気分させてくれました。ユネスコ世界遺産にも指定されているキエフ市内の歴史的な建造物や美しい自然…自然といえば、ソフィア・ローレンが主演した映画「ひまわり」の舞台がウクライナだということを知っていましたか？ また日本の国技の相撲で柏鵬時代を築いた、大鵬のお父さんがウクライナ(ハリコフ)出身だったということも雑学として教えていただきました。北部のチェルノブイリ原発周辺の汚染地域である30キロゾーンには、毎年3,000人の観光客が訪れ、南部のクリミア半島にあるオデッサやヤルタは、歴史的な風情が漂い、古くから貴族の保養地としても賑わっています。

ビタリーさんのお話のあと、10月に代表団として訪れた伊那の原さんと小牧さんから、現地の近況報告を聞きました(詳細は、P1とP4参照)。講座を終えて、榎本さん手作りのウクライナのお菓子とお茶で茶話会をしながら、「スタディ・ツアーに参加したら、美しい自然も、歴史的な建造物も、そして温かい人々との交流も、全て体験できますよ」…と運営委員の抜け目ないPRも忘れません。あっという間に、お開きとなりました。(美)

次回のウクライナ講座は料理教室編

4月のスタディ・ツアーも間近に迫り、いよいよ人気の料理講座の登場です。今回の講師は、料理も得意のベレジヌイ・ビタリーさんです。

ウクライナの人たちは、老若男女にかかわらず料理好きな人が多く、ボルシチもレシピはそれぞれ。

今回は、どんな味で楽しませてくれるのか、とても楽しみです。奮ってご参加を!!

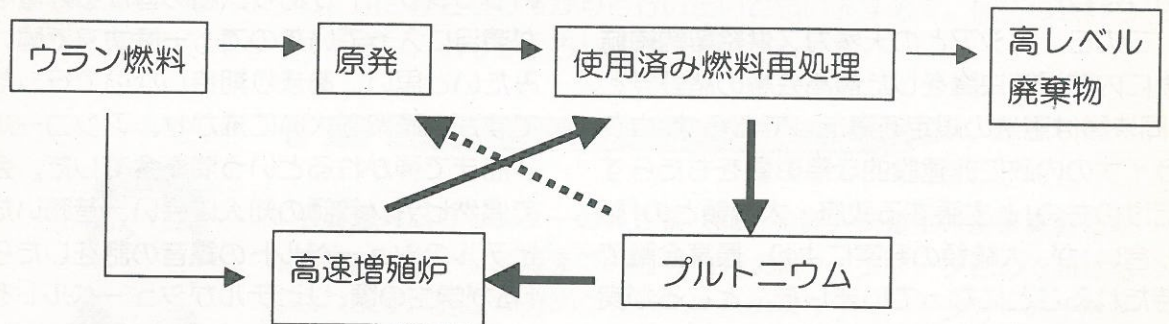
- 日時 2月11日(土)午後1時~4時
 - 場所 東生涯学習センター料理教室(地下鉄「新栄」下車。芸創センター東隣 TEL 052-932-4881)
 - 参加費 1,500円(材料費含みます)
 - 定員 30名・予約制 2月6日(月)までに、事務局までお申し込みください。
- 【事務局 TEL/052-836-1073】

★予定のメニュー★
ボルシチ
にんじんのガーリックサラダ
キャベツと肉の炒め物



すでに何回も書いたが、原発の燃料ウランは石炭や石油と同じ地下埋蔵資源で、このまま使い続ければあと 40 年ほどでなくなる。そこで、「ウランの中でも燃えないウラン (U238) を、原子炉の中で燃えるプルトニウム (Pu239) に替えることができれば、ウラン資源の有効寿命は約 100 倍にのびる」と科学者たちは考えた。それを実現するのが、高速増殖炉と使用済み燃料の再処理である。この夢の原子炉 (日本では「もんじゅ」と再処理の組み合わせは、「核燃料サイクル」と呼ばれる。だが、実験が進むにつれてその夢は敗れ、実現不可能な夢を見つけているのは、今や世界中で日本だけである。何故、日本は核燃料サイクルに固執するのか。

核燃料サイクル略図



燃えないウランから燃えるプルトニウムを作り出す高速増殖炉は、実際にやってみると、増殖どころか、却って燃料のプルトニウムが減少したり、増殖 (倍増) には 100 年以上かかったり、という代物だった。「もんじゅ」も設計上は燃料倍増に 90 年かかる。この時間を短縮できないわけではないが、それは増殖炉が限りなく原爆に近い炉心構造になり、暴走事故を起こす危険が増すことである。結局、日本を除き、世界中で高速増殖炉の開発は放棄された。

アメリカは、チェルノブイリ事故に先立つ 1983 年に、クリンチリバー高速増殖炉計画を放棄している。それ以前に、すでに完成していた再処理工場も解体した。「経済性がないばかりか、核拡散につながる」というのが、主な理由である。結局、目標の「サイクル (図の太矢印)」は断たれ、通常原発から出る使用済み燃料を再処理すれば、プルトニウムと高レベル廃棄物だけが残ることになった。プルトニウムは勿論、長崎原爆の材料と同じ物である。日本は、この邪魔者のプルトニウムを、通常原発

で燃やす「プルサーマル」をやって燃料を節約する、と言い訳している。プルトニウムを保有するのは、危険なことなのである。アメリカが北朝鮮を目の敵にするのは、北朝鮮が再処理工場を作った実績があるからである。現在、イランの核開発が話題だが、イランは「通常原発の開発だ」と主張している。にもかかわらず、アメリカを中心とする西欧諸国は、イランの意図は「危険な核開発だ」と決め付けている。だが、考えてみると良い。日本はすでに、青森県六ヶ所村で核燃料濃縮工場も稼働中で、まもなく「再処理工場」も稼働させようとしている。立場が違えば、これほど危険な国はないはずである。日本は、その気になればいつでも核兵器を作れる技術と材料を持っている。西欧諸国が日本を危険視しないのは、核兵器を禁止し、IAEA (国際原子力機関) の査察を受け入れているからである。しかし、核燃料サイクルを持つ限り、日本も核保有の疑念を晴らすことはできない。(河田)

竹内さんのウクライナ便り

キエフでは、長い間0℃前後の気温が続いていましたが、1月19日、予告されていた寒さがついに訪れ、零下17℃くらいまで冷え込みました。戸外を歩くと、息を吸うたびに鼻の中が一瞬凍り、足元ではさらさらの雪がキュッキュッときしむ音を立て、ちらちらと光を反射し、心なしか、道行く人の身ごなしにも、「ついに来るべきものが来た」(?)という緊張と活気が感じられます。市内の交通整理警官は、通常の100名が200名に倍増され、事故を最低限に抑えた、という報道がありました。

この日、ロシアとの天然ガス供給契約締結後に内閣退陣決議をした最高会議の諸野党と、「同決議は憲法の規定を満たしておらず、ウクライナの内政に非建設的な悪影響をもたらすだけのもの」と主張する政府・大統領との「話し合い」が、大統領の発案により、最高会議で持たれることになっていました。ところが実際には、大統領と閣僚らの席は空いたままで、「話し合い」を持ってこみあわない攻撃の応酬に終わるだけ、と考えたという最高会議議長リトヴィン氏が、「大統領にキャンセルを勧告した」と記者会見。大統領以下の政府高官らは、水泳パンツ一枚の姿で、正教の「洗礼祭」であるこの日、氷に穴をあけたドニエプル河に次々と飛び込んでいくさまを、TVニュースの画面で国民の前に呈示しました。この日水垢離（みずごり）を取る…ではなく、水を浴びた人は、自らの罪をそそぐことができるのだということですが、大統領や閣僚らは、国民の前に「クリーン」なイメージをアピールしているというよりは、野党に負けぬ体力と気力を誇示しているかのように見えました。ある世論調査(2,009名対象)によれば、3月の統一選挙でヤヌコーヴィチ氏の「地域党」を支持するとした回答者は31%。エハヌーロフ首相を比例代表リストの1位に据えた「我らのウクライナ」は13%、「ユーリヤ・ティ

モシェンコ・ブロック」は16%の支持だそうです。どころんでも安定多数派が形成されそうにない最高会議選の見通しは、今後も続きそうです。(ちなみに、同じ世論調査によれば、ロシアとの天然ガス紛争後、与党支持から野党支持に変わったという人は、野党支持から与党支持に変わったという人と同じく13%だった由。)

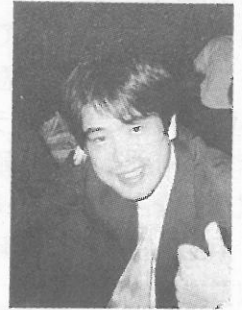
18日夜は、まだマイナス7℃くらいだったかとあいまいに記憶していますが、フィルハーモニー・ホールで、エストニア出身、現在サンクト・ペテルブルグで活動しているまだ若手のピアニストがシューベルトを弾くというコンサートがあり、私の昔から好きな演目に入っていたので、一度ナマで聴いてみたいと思い、あまり期待しないで行ったのですが、聴衆を大いに沸かせ、アンコールが3曲まで弾かれるという演奏会でした。会場で偶然ピアノ教師の知人に会い、昔聴いたリヒテルのシューベルトの録音の話をしたら、「私が学生の頃、リヒテルがシューベルトを弾くのを聞いたけど、彼にはシューベルトは合わないと思った」ということでした。今年はシヨスタコーヴィチの生誕100周年で、彼の交響曲全曲の演奏も企画されています。私のわりと好きなシレンコ氏が指揮するようなので、行ける時には行って聴こうかな、と思っています。フィルハーモニーから近いウクライナ美術館では、ゴヤの版画展が開かれており、私は一度人と行ったのですが、ゆっくり見る時間がなかったので、できればもう一度行くつもりです。(1月19日)



〈クリスマスの独立広場(キエフ)〉

会計を辞任するにあたって

新年おめでとうございます。さて、私鈴木は、諸般の都合により2月より仕事を変わる事となり、救援・中部の活動をやめなければならなくなりました。突然のことでしたので、皆様にはご迷惑をお掛けしますが、この一年で学んだことを糧に、今後の救援・中部を陰ながら応援しつつ、この場を去りたいと思います。短い間でしたが、支援者の皆様、ほんとうにお世話になりました。



また、上半期会計報告の一部に訂正があった【医薬品提供事業・派遣費・評価事業・駐在員費・派遣費などの費目（仕分け）を一部変更しました。収入・支出の金額の変更はありません。】ことを、ここにお知らせするとともに、お詫び申し上げます。前代表の田中さんのご指摘により、今回に限らず、会計に関してはすいぶん助けられました。

会計報告変更の内容についてですが、今後の会計を引き継いでいく上で、私のいた時のような混乱がないように、引き継ぎをしっかりと行いたいと思いますので、後任の会計も温かく見守ってやってください。どうかよろしく願いいたします。



名古屋NGOセンターのNたま（NGOの卵）研修生の安原真穂と申します。1月から3月までの約3ヵ月の間、インターンとしてお世話になります。主に4月のウクライナへのスタディー・ツアーの仕事を担当していますが、鈴木さんの下で、会計の仕事も勉強させてもらっています。今まで経験したことのない様々な仕事を通して、いろいろ

な発見があり、非常に充実した日々を過ごさせていただいています。

例えば、今日はポレーシェ用の封筒の住所を印刷するために、倉庫になっているアパートの別室を始めて見ましたが、ものすごい荷物にびっくりし、荷持の重さにびっくりし、部屋の寒さにびっくりし、封筒の真中に住所を印刷する難しさにびっくりし、印刷が終わった時は心からホッとしました。（汗）

最初に楽園アパートを見たときは、かなりびっくりしましたが、中に入ると、スタッフの熱気とアパートの古いけれど味のある部屋が、非常に居心地が良く、ここに住んでしまおうかと思うほどです。個性豊かなメンバーのおかげで、笑いの止まらない楽しい時間は、腹筋を鍛えるため？にとってもいい感じです。（今も、鈴木さんの「竹内まりあ」を聞かされています。聞きたくなくても聞こえてくるので、笑いをこらえるのが大変です。）

私自身は、2児の母【6歳と3歳の女の子がいます。】なので、ウクライナ訪問時の写真の中では、特に孤児院の幼児にひきつけられてしまいました。自分の身に同じことが起こったらということを想像すると、とても恐ろしい事件だと身近に感じるすることができます。その日を境に、家族の幸せが壊れてしまったチェルノブイリの人々を、支援し続けているチェルノブイリ救援・中部の活動に、少しでも力になれたことがとても幸せです。（自ら、ポレーシェの封筒にラベル貼りをしている残業中の鈴木さんの歌は、「中森明菜」に変わりました。なぜか女性の歌が好きな彼です。やめるのが惜しい人材ですね。…と言っておかないと、拗ねますかね？）

事務局便り

新年明けましておめでとうございます。今年は、チェルノブイリ原発事故から20年目。世界を震撼させた当時の日々が思い出されます。多くの人々にとっては過去のことも、被災地では今でも「事故は昨日のこと」です。チェルノブイリを忘れない為に、また日本でも同様の事故を起さないために、今年も皆様よろしくお祈りします。

●スタディー・ツアー参加者募集 締め切り迫る!! (あと1ヵ月) ●

4月23日(日)出発～5月3日(祭日)帰国予定のチェルノブイリ・スタディー・ツアーでは、被災地の病院や学校、汚染地域も訪問します。20年目の放射能汚染の実態、そこに暮らす人々の声を聞く旅にしたいと思います。また、ウクライナの人々に日本を紹介する「日本の日」イベントも企画。是非、この機会をお見逃しなく。詳細は事務局まで。(チラシもあります。)

●「チェルノブイリ20年記念 チャリティ・バザール」●

中部よつば会のご協力を得、チェルノブイリ被災者支援の不要品バザールを行います。

○会場 名古屋駅前の「愛知県中小企業センター：1階イベント・ホール」

○日時 3月4日(土)午前11時～午後5時

名古屋国際センター後援(ウクライナ大使館後援は申請中。)

売上げ金を被災者に届けます。会場では、チェルノブイリの子どもの絵画展、ウクライナの物品販売の他、名古屋国際センターなごや民間大使ベレジヌイ・ビタリーさんの「ウクライナ紹介講演」や、「チェルノブイリの今」を紹介する講演やビデオ・スライド上映もあります。また、ボルシチなども食べられます。お問合せは事務局(052-836-1073)または、中部よつば会(電話：052-937-5584)まで。チラシ配布などにご協力ください。

●ウクライナ民間大使を囲む集い●

12月18日、名古屋国際センターで、「民間大使ビタリーさんを囲む集い」があり参加しました(遠山・神野美・山盛・河田)。万博でウクライナを知った方の参加も多く、美しい映像と巧みな日本語を操るビタリーさんのウクライナ紹介で、200名ほどの参加者は、楽しいひと時を過ごしました。名古屋の合唱団「ミール」によるウクライナ民謡や、大阪から参加したウクライナ・ダンス・ペアに加え、ウクライナからの留学生アンドレイさんのダンスも圧巻でした。

国際センターでは、今後もウクライナ紹介イベントが続く予定です。

編集後記

- ☆いよいよ極寒の地へ旅立つ。行ってすぐに「仕事」とは、そーてい外だった。ブログを開設予定、乞うご期待。(京)
- ☆年末から大物買いを余儀なくされている。電子レンジ・TV・DVD、果ては車。部屋の中には、付箋のつきまくった取扱説明書が散乱。何をしてもまず取説。面倒ったらありゃしない。(佳)
- ☆テレビ…壊れた…(泣)。クイズの正解を知りたかったのに、妙な画面になった途端、バチッ! およそ2週間、報道社会から取り残された室内は、静か過ぎるけど読書には最適だね。(美)
- ☆昨年末、いわき市の我が家に「原子力立地給付金振込のお知らせ」というハガキが舞い込んだ。「平成17年度分として、4,056円を貴口座に振り込みます」との事。そうか、これがかの有名な交付金か! 慰謝料? 謝礼? それとも…。「受け取り拒否」も考えたが、結局、「チェル救に寄付する」ことに。東北電力殿、あしからず。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473